

平成10年度女子委員会全国連絡委員会会議報告

- 期日 平成10年7月11日～12日
- 会場 大阪市立長居ユースホテル及び長居陸上競技場内会議室
- 参加者 阿比留亜希（代理出席）・・・平成10年度女性理事なし
- 40県中、連絡委員47名が参加、女子委員会12名 合計59名
くわえて、大阪女子委員会より9名が参加

【会議報告】

(1日目)

- ① 1997年活動報告、1998年活動計画、1998年度IAAF、JAAF女子陸上競技年の活動方針と活動の取組。

- ② 各県の報告、質疑応答、まとめ

茨城県が今年度より女性部ができた。1998年が陸上競技女子年という説明をしたことが効果的だった。女子の公認審判員は217名。大会に出席している人数はそれに対して少ない。平成14年の茨城インターハイでは、女子が多く入れるようにしたいとのこと。

香川県が平成4年から女性部を創設。周囲の理解がある。この会の報告も理事会でしている。平成7年に親睦会をスタート。現在では中体連とも連携しあい、年2回の食事会を実施している。昨年は30名の参加があり、和やかにインターハイの意気込みを話し合った。棒高跳びの審判を女性部担当。競技そのものも女子に浸透していきっている。

熊本県今年、日本選手権、来年は国体がひらかれる。女子を非常に大切にしてくれ、女性理事が陸上競技内に3名いる。女子駅伝の監督に女子を起用。女子が投擲の審判長もする。女子の種目は女子で審判をするようにしている。来年の国体の審判服は、女子で考え、係りにもいれてもらえた。毎月新聞も出している。

広島県

アジア大会をきっかけに女子の審判員がたくさん集まった。中国女子駅伝では、女子の県の女性に声をかけて、70歳くらいのかたまできていただいている。

鳥取県

8月に強化部共催ではあるが、女子の棒高跳び講習会を開く予定。また、毎年高校駅伝の女子の中継所を女子だけでやっている。ハンマー投げの講習会もやっていて、審判も女子だけでやろうとしており、きちんとでき好評だった。

※このほか、和歌山、北海道、岐阜、沖縄、高知、三重、長崎、山梨、島根各県の報告

- ③ グループディスカッション

『女子陸上競技に人口を増やすことをめざして』

◎現状と対策

- ・女子の指導者が少ない
- ・地域によって男尊女卑がある
- ・近隣の学校から集まって練習している
- ・女子の陸上ばなれが目立つ
- ・中学校2, 3年生にかけての伸びが小さい
- ・中学校の部活動入部の生徒が減ってきている
- ・過去に業績がないので、指導しづらい
- ・女子の指導者は中学校はあっても、高校は少ない

- ・投擲種目がへっぺはいないか。
- ・女子部主催で新種目の講習会を実施している。
- ・小学校の陸上クラブがあっても、中学校に入ってから指導者が少ない、いない。
- ・小学校の陸上クラブはOB,OGが指導している。
- ・普及するのに、マスコミを利用して宣伝している。

以上の現状にたいし、対策は以下のとおりである。

- ・大会を楽しめることの考案を
- ・小学校中学校の一貫した指導が必要
- ・小学校の大会は保護者が多いので普及につながる
- ・中学校、高校のばいぶが必要なので、高校の指導者もたくさん必要
- ・学校の枠をこえて指導する体制づくり
- ・小学校は多種目させ、どの種目にも適応できるようにする
- ・小学校のころから陸上を楽しませる、楽しさを味わわせる、いかに続けさせるかである。
- ・高校生が小学生に指導する
- ・審判同士の交流をふかめることで、普及につなげる
- ・女子が審判にしやすい環境づくり
- ・審判の要請をするために、大学卒業生の追跡をする
- ・学校単位をはなれ、地域でも指導をしていく
- ・小学校の大会の表彰をふやし、ほめて、やる気にさせていく
- ・指導者不足を各地域で取り組む。学校別でなく合同練習、また集まった指導者は自分の専門種目を種目別にわかれて指導する
- ・小学生の大会をふやす
- ・観客の動員
- ・指導者の養成をしていく